

共同研究計画（案）

1 研究テーマ

外国語に慣れ親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

～学びの連続性を意識した授業実践を通して～2年次

2 テーマ設定の理由

○ 今日的な課題から

小学校では、平成23年度から高学年において外国語活動が導入されている。今回の指導要領改訂により、外国語の学習意欲を持続させ、小中学校間の接続を円滑にして学習したことを発展的に生かすため、高学年において外国語が導入された。これまで高学年で行われていた外国語活動は中学年に導入されることになった。

中学年では「聞くこと」「話すこと」を中心にした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高める。その上で高学年においては、段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うことになった。

このような教育課程の大きな転換を迎えるにあたり、そのねらいに迫るためにどのような指導が適切であり効果的かを明らかにするべく、授業研究を中心に積極的に研究を進めていくことは大変意義のあることである。

移行期間2年目となる今年度は、完全実施を次年度に控え、その準備を完全にしていかなければならない。次年度、スムーズに外国語指導を開始できるよう、2年間の実績を蓄積、整理していく必要がある。

○ 本校教育目標の具現化から

本校の教育目標は「豊かな心と創造力を持ち 生き生きと学び 思いやりや優しさにあふれた児童の育成～オール立町！ 立町っ子の笑顔のために～」である。この目標を具現化するために目指す子ども像として、「明るくやさしい子供」「豊かに考える子供」「根気よくがんばる子供」を掲げている。これらの児童像を支える基盤の一つとして「学校・家庭・地域が連携したコミュニケーション力の育成」がある。コミュニケーション能力を高める方策の一つとして、外国語活動を工夫・実践し、表現力、コミュニケーション能力の幅を広げさせたい。

また、平成22年度から地域・家庭・学校の協働目標を「自分の思いを最後まで話すことができる児童の育成」と設定し継続して取り組んできている。昨年度からは、目標設定をワンランクアップさせて「自分の思いを分かりやすくしっかりと話しましょう」とし、学校・家庭・地域の三者協働で児童に働き掛けを行っている。

以上のことから、外国語の学習を通して「自分の考えを確かに表現できる」児童を育成していくためにコミュニケーション能力を伸ばすための授業づくりをしていくことで本校の教育目標の具現化を図ることになると考える。

○ 児童の実態から

平成30年度、児童・保護者・教員に行った教育活動アンケートで学校評価の協働型目標に関する調査項目、「自分の思いを最後まで話しているか」の結果は、「ややそう思う」のB評定までを含めれば、児童、保護者、教員とも8割程度の到達度を示している。これは過去3年間でほぼ同じ結果である。しかし、児童で40%弱、保護者は30%、教員に至っては10%程度にとどまっている。このことは、教員の中では、児童が十分に思いを伝え切れていない、言い換えれば今後さらに

力を伸ばすことが期待されているということを示している。

積極的に言葉にして伝えるという外国語の特性を生かし、その資質・能力をのばしていくことは、コミュニケーション能力の向上に役立つものとする。

平成30年度一年間は、外国語活動を研究教科とした初年度として授業実践を重ねてきた。各学年で、外国語で伝えることの楽しさを感じ取ることができるような指導過程を工夫した。研究授業を行うたびにそれを全体で検証することで成果と課題が見出され、それを受け次の授業でさらにより良い形を目指すという形が確立されている。（※成果と課題は別紙参照）

しかし、学びの連続性についての検証は十分とは言えず、この1年を通して各学年の目指す姿をより明確にしていくことが必要となる。

3 テーマに関する基本的な考え方

- (1) 「外国語活動及び外国語に慣れ親しみ」とは、中学年においては音声を中心としたコミュニケーションの体験を通して外国語の基本的な表現に慣れ親しむということである。高学年ではその力を生かし、「聞くこと」「話すこと」に加えて「読むこと」「書くこと」の4技能を扱う。ただし、「読むこと」「書くこと」については中学年における外国語活動から十分に音声で慣れ親しんだ語彙や表現を読んだり書いたりすることに細かな段階を踏んで慣れ親しませることである。
- (2) 「進んでコミュニケーションを図る」とは、慣れ親しんだ言語や表現を通して他者と外国語でコミュニケーションを果たせた体験が自信となり、さらに新しい表現を身につけたいという意欲へとつながるとのことである。

4 研究目標

学年の発達段階に合わせ、その連続性を意識した活動を工夫したり、教材等の活用の仕方を工夫したりすることで、児童が進んでコミュニケーションを図れるような授業作りをする。

5 目指す児童像（案）

外国語・外国語活動を通して進んでコミュニケーションを取ろうとする児童

6 研究の主な内容

- 外国語活動及び外国語において授業実践を行う。
- 児童が外国語の見方・考え方を働かせ、進んで活動を楽しもうとする指導の工夫をする。
 - ①進んで友達と関わり合うための指導過程を工夫する。
 - ②「We Can!」「Let's Try!」「Hi friends」の効果的な活用の仕方を考える。
 - ③効果的な教材を探したり自作したりして工夫する。
- 学びの連続性について明らかにする。各学年の到達目標を達成するための指導過程や活動、語彙等を明確にする。

7 研究の視点

◎児童が進んでコミュニケーションを取ることができるような指導過程の工夫

※今年度さらに具体化していく・・・

低学年部	
中学年部	世界の様々な言語や文化があることに気付き、外国語を使った簡単な会話や伝え合いに慣れ親しませる。アルファベットの形の特徴やその読みに慣れ親しませる活動の工夫をする。(案)
高学年部	これまで慣れ親しんだ外国語の「話す」「聞く」活動を踏まえ、それらを効果的に行うための「読む」「書く」活動の工夫をする。 ※自分の思いを積極的に英語で伝えようとする意欲の形成は？

8 研究の方法

(1) 授業研究

① 学年部の研究計画

低学年部（1～2年，研究主任，教務主任）

中・高学年部（3～6年，特別支援学級，少人数，研究主任，教務主任）

② 授業実践

1～6年全員授業。

全校授業は全員参観。学年部授業は学年部と希望者で参観。

○今年度研究授業計画（31年度に決定する）

回	月日	曜日	学年部or全校	学年	単元
1	6月25日	火			
2	7月10日	水			
3	9月19日	木			
4	10月24日	木			
5	11月21日	木			
6	12月9日	月			
7	1月14日	火			

③ 事前検討会，事後検討会の実施

事前検討会は学年部で実施する。（授業作り訪問は全員参加）

事前検討会は構想検討，指導案検討（発問・指示の精選）と段階を踏む。

事後検討会は授業研究の結果と考察を行う。全校授業は全員参加とする。学年部授業は学年部と授業参観者で行う。

④ 係分担

授業者，授業記録，写真記録，事後検討会記録，進行（研究推進委員）

(2) 研究全体会

①研究全体会は、研究主任を中心に研究推進委員会が主体となって進める。

第1回(4月)は共通理解、年間活動計画の協議、確認を行う。

第2回(年度末)は、1年間のまとめ、来年度の取り組みについて協議する。

研究推進委員会構成メンバー：校長、教頭、教務、研究主任、低学年部1名、中・高学年部1名

【活動内容】

- ① 授業実践に向けての共通理解及び研究の方向性の検討
- ② 意識調査の内容検討、実施。集約、分析、考察
- ③ 研究計画および研究のまとめの作成
- ④ 必要に応じた現職教育の計画

(4) 研究のまとめ方(学年部、全体共通)

① 年度始めに「校内研究ファイル」(空ファイル)を配付し、随時、資料等を収めていく。

② 「成果・課題・改善案」を話し合い、明らかにする。

③ 年度末のまとめ方

・CD化。紙資料は印刷し、校内研究ファイルに収める。→研究終了時に製本化

(5) 印刷配付物等について

20部印刷

(校長、教頭、教務、養護教諭、少人数、各学級担任に配付、残部は研究主任がまとめておく。)

①指導案はA4表裏1枚、ワークシート等付加

②授業記録

- ・視点に対応した活動について焦点化して記録する。
- ・手書き、パソコン入力どちらでもよい。
- ・事後検討会までに参加人数分印刷
- ・全校授業では、ビデオ、デジカメ記録を行う。

③検討会後の成果・課題・改善案を研究だより等で周知する。